



### 神戸女学院大学カウンセリングルーム 開設30周年の歩み

## 豊かで充実した 学生生活を支援する



神戸女学院大学カウンセリングルームが、今年で設立30周年を迎えた。学生相談を担う独立機関がこれほど長く発展してきたところは多くない。個々の学生支援を重要視してきたことの証でもある。

これを記念して、哲学者・鷲田清一氏による特別講演会『弱さについて』が、5月30日に神戸女学院講堂で開催された(13ページに抄録掲載)。また、カウンセリングルームディレクター・小林哲郎先生と同機関の在り方や学生の現状などについて話を伺った。



●カウンセリングルームディレクター  
小林 哲郎 先生

●カウンセリングルーム専任カウンセラー  
安住 伸子 先生



小林 哲郎 先生

「この30年間で、学生像は変化しましたか？」

安住 かつては、こちらが話を聞いていれば、自分で内省したり洗い出ししたりして、自ら成長していく学生が殆どでした。今は、自分の状態を語れない学生が増えています。例えば、登校できない学生に理由を尋ねると、「朝起きられない」と言う。「なぜ起きられないの?」「なんとなく「卒業はしたい?」「したい」「勉強は」「やる気が出ない」卒業はしたいが授業に出られないというところに困っているのですが、自分の状態を語れない。どうすればいいのかわからないんです。なかには、「しんどい」と言うけれど、それがつらいのか苦しいのか痛いのかわからない学生もいます。

「そのような学生にはどう対応を?」

安住 性格テストや絵を描くなど、様々な媒介を使い、農地を耕すように言葉を掘り起こしていきます。時間をかけてじっくり話を聞き、本人の、何かわからないこの感じを一緒に考えるんです。そして、例えば「つらいのね」と言うと、学生は「ああ、これが「つらい」ということか!」と、自分の



感情に名付けをし、自分の状態を把握することを学んでいく。そういう子が、就職活動時に圧迫面接を乗り越えるまでに変わる場合もあります。

「自分を語れない学生が増えた背景には何があるのでしょうか?」

安住 それまでの受験体制やゆとり教育などにより、本人の語る場所に耳を傾けて貰えず、課題をこなす、場に適応することで何とかやってきたというのが大きいでしょうね。デジタル化が進み、既存の選択肢に「はい」「か、いいえ」で答えれば、ある程度のことば出来てしまう環境も無関係ではないと思います。

小林 学生はいち早く時代を映す鏡です。どんな学生が来始めたか、どんな悩みが増えてきたか、その傾向から大学全体の問題が見えてきます。それを察知し、中核やネットワークなどで話し合い、改善していく。カウンセリングルームは、大学全体の方向性を修正していく意味でも、非常に重要な存在だと言えますね。

「神戸女学院大学のカウンセリングルーム利用率は高く、現在10%を超えているとか。多彩なグループワークの導入が関係しているように思いますが、その内容や目的をお聞かせください。」

安住 グループワークはカウンセラーとの顔合わせの場であり、友達や知り合いをつくる場でもあります。性格検査や職業興味テストを随時受けられるほか、ノートやレポートの書き方指導、お菓子などを楽しみながら会話するティーアワー、キッチンを使うランチセッションなど、学生が気軽に来られるような内容で展開し、広報にも力を入れていきます。

小林 学生が悩みや問題を抱えてしまわないための予防の意味があります。また、栄養状態の悪い学生が多いため、健康増進などの目的も含んでいます。

「今の学生に何かメッセージを。」

安住 何もなくても、一度カウンセリングルームに足を運んでください。第三者、しかも聞くプロに話を聞いて



安住 伸子 先生

貫うという体験は、友達に愚痴ったり親に相談したりするのは、全然違います。先入観なしで話を聞いて貰え、相談にのって貰えたという経験は、本当に行き詰った時の支えとなり、そこから打開策が見えてきます。

小林 「サークルどうしよう」とか、ちょっととした身近なことを、生活相談窓口のような感覚で話し、利用して貰えるといいですね。ここに来れば、必ず何らかのヒントが得られますから。

「今後の展望をお聞かせください。」

安住 現在は、発達障害(アスペルガー症候群、自閉症スペクトラム等)を抱える学生への支援を模索しています。教室に入れない、聴覚過敏で集中できない、視覚的情報でしか思考出来ないなど様々なケースがあり、それぞれ必要な支援が違うため、かかる労力が大きいのが問題です。

小林 発達障害を抱える学生については、大学全体の協力が重要です。学生支援ネットワークなどで一人ひとりの状況を把握し、諸先生方に伝え説明して理解を促していきます。また、それらの学生の進路問題にも取り組まねばなりません。

2014	2013	2011	2010	2009	2008	2006	2005	2004	2003	2002	2001	2000	1998	1996	1995	1994	1990	1989	1987	1986	1984	30年の歩み		
●カウンセリングルーム開設30周年		●学生支援ネットワークの運用開始					●カウンセリングルームに名称変更								●社交館に設置	●阪神淡路大震災の影響により、学内滞転			●学生相談室分室開設	●学生相談室の設立			組織の変移	
	●発達障害を抱える学生支援の模索	●学生支援ネットワーク稼働、カウンセリングルームと学生生活支援センター、教務課、チャプレン室、保健室などが連携し、契になる学生や教職員との全学的な「クックアップ」体制を作る			●教員研修会にて学生対応に関する研修を行う			●キャリアデザインプログラムとして、社会で活躍中の卒業生に話を聞く「シリーズ10年後の私」を開催	●相談についてはキャリアセンター、学内のことについては学生相談室という相談業務の切り分けができる	●ミニレクチャーをウィークプログラムに導入			●相談のあり方がこれまでの医療モデルから、学生の成長を助けることを目的とする教育モデルに転換	●グループプログラム「サマーセミナー」実施			●中高部のカウンセリングにも携わる	●進路決定支援プログラム「キャリアグループ」導入(10人前後/年1・2回)		●自己探求や進路選択のためのグループワークを導入			活動の概要	
		●経済的な事情や家族の病気など、抱える問題が複雑化してくる	●目的意識を持たず入学し、ドロップアウトする学生が増える					●ひきこもり、不登校、ひとり食事をする学生が増える			●摂食障害、暴力、ストーカーの相談が増える		●キャリアグループ参加希望者が急増(1000人以上/年7・8回)。進路の悩みが増える			●職業不安、うつが増える		●不登校が増える						学生の変化
			●大学全入時代に入る			●個人情報保護法設立		●少子化社会に			●大学全入時代を前に大学改革が始まる		●求人倍率1を切る		●バブル崩壊により企業業績が悪化。求人倍率低下	●阪神淡路大震災		●「新人類」が流行語に	●男女雇用機会均等法施行					時 勢